

WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.137

2026.6.25 発行



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.137 目次

令和8年度総会報告(収支報告)	2
鳥類医学における Refeeding syndrome (再栄養症候群)	3-7
施設紹介ー沖縄こどもの国	8-9
寄稿写真のご紹介	10
韓国のツキノワグマ	11
寄付のお礼	11
事務局日誌	11-12

令和8年度総会報告（収支報告）

令和8年4月12日（日）に令和8年度総会がWRV・立川事務所にて開催され、全ての審議案件について承認されました。以下に、令和7年度収支報告・令和8年度収支予算を改めてご報告致します。

会計報告

（特定非営利活動）

令和7年度収支報告書（令和7年1月1日から令和7年12月31日まで。単位：円）

収入の部	金額	支出の部	金額
年会費収入	736,000	事業費	
事業収入	430,000	①傷病野生動物の救護と野生復帰	320,544
委託事業収入	8,571,658	②病性鑑定及び疫学調査	0
補助金収入	0	③学会報告、会報、講習会、HP等	6,635,751
寄付金収入	17,000	④野生動物の傷病予防に関する事業	0
預金利息	10,443	⑤生物多様性の保全に関する事業	0
雑収入	0	⑥野生動物の救護施設に関する事業	0
収益事業会計繰入金	0	⑦他団体との交流	161,730
収益事業収入	304,830	⑧収益事業原価	21,830
		管理費	3,607,302
		租税公課（消費税）	586,900
当期合計金額	10,069,931	当期合計金額	11,334,057
当期収支差額	-1,264,126		
法人税等充当金	-70,000		
前期繰越収支差額	37,009,236		
次期繰越収支差額	35,675,110		

＜令和7年度の主な事業実績＞

- ・環境省水鳥救護研修センター業務請負事業（水鳥救護研修・情報整備事業等）
 - ・同請負事業による研修（年3回）及び岩手県の協力による現地研修（盛岡市）の実施
 - ・日本獣医生命科学大学、帝京科学大学、東京環境工科専門学校等、特別実習の実施
 - ・傷病鳥獣救護活動、および診療カルテの集約、学会参加等
 - ・「ヒナを拾わないで!!」キャンペーンの実施（共催）
 - ・関係団体との事業協力および事業等への参加（本部、各支部）
 - ・「プラスチックゴミ対策に関する講習会」の実施
 - ・野生動物リハビリテーター養成事業（神奈川支部）
 - ・各地の研究会、委員会、シンポジウム等への参画（リモートを含む）
- －その他

令和8年度予算案（令和8年1月1日から令和8年12月31日まで。単位：円）

収入の部	金額	支出の部	金額
年会費収入	720,000	事業費	
事業収入	430,000	①傷病野生動物の救護と野生復帰	330,000
委託事業収入	9,700,000	②病性鑑定及び疫学調査	20,000
補助金収入	0	③学会報告、会報、講習会、HP等	6,580,000
寄付金収入	100,000	④野生動物の傷病予防に関する事業	10,000
預金利息	10,000	⑤生物多様性の保全に関する事業	10,000
雑収入	0	⑥野生動物の救護施設に関する事業	10,000
収益事業会計繰入金	0	⑦他団体との交流	200,000
収益事業収入	300,000	収益事業原価	20,000
		管理費	3,500,000
		租税公課（消費税）	580,000
当期合計金額	11,260,000	当期合計金額	11,260,000
前期繰越収支差額	35,675,110	当期収支差額	0
		法人税等充当金	0
		次期繰越収支差額	35,675,110

鳥類医学における Refeeding syndrome (再栄養症候群)

WRV副会長／大阪支部長 中 津 賞

はじめに

International Bird Rescue は、OWCN(Oiled Wildlife Care Network)を構成する重要なメンバー機関の一つである。WCN がカリフォルニア州全体の油流出対応ネットワークを統括するシステムであるのに対し、IBR はそのネットワーク内で実際に油汚染された鳥の救出・洗浄・リハビリを行う主要な現場実行部隊（施設提供者および専門家集団）としての役割を担っている。両者は連携して、油流出対応訓練やスーパーバイザーの育成なども共同で行っています。今回の投稿は、彼らの主導する油汚染等で長期摂食できなかった野鳥の救護技術について解説するものである。

Refeeding syndrome (以下 RFS) は、長期間の飢餓や重度消瘦状態にある個体に対して急速に栄養補給を行った際に生じる、致命的になり得る代謝性合併症である。

ヒト医療や小動物臨床では広く認知されている一方、野生動物救護、とりわけ鳥類救護の現場では、症例の集積や体系的な整理が十分とは言えない。しかし実際には、油汚染海鳥、衰弱渡り鳥、長期飢餓状態にあった猛禽類などにおいて、RFS が予後を大きく左右する重要な病態であることが知られている。

本稿では、野生動物救護に携わる獣医師・動物看護師、救護ボランティアを対象に、鳥類医学の観点から RFS の病態生理、臨床症状、診断の要点、予防および管理について概説する。

病態生理

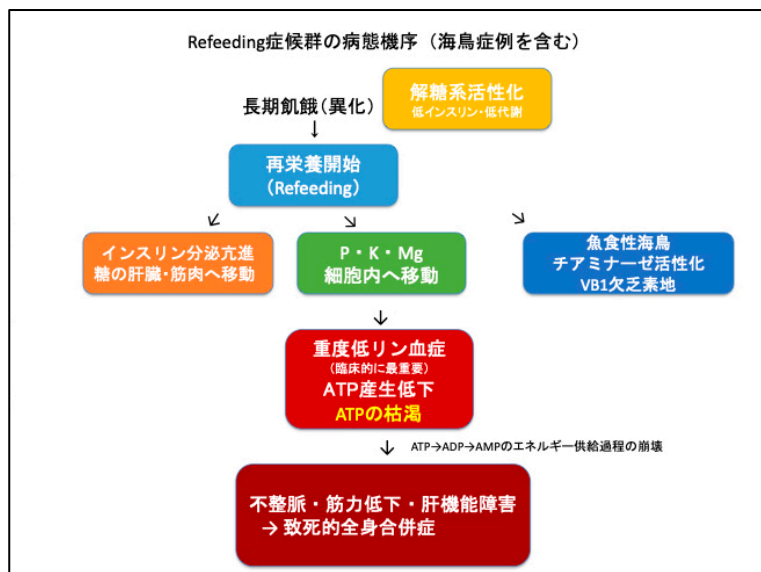
鳥類の特異性としては高代謝・高体温であり、飛行筋（大胸筋）依存のエネルギー貯蔵と有核赤血球を持つ。

Refeeding syndrome (RFS) とは、飢餓状態（異化状態 **Catabolism**）にある鳥に対して急激に栄養補給を行った際、代謝様態が異化から同化 **Anabolism** へと急激に転換することで、電解質の細胞内移動や ATP 産生障害が生じ、重度の代謝障害を引き起こす病態である。哺乳類よりも代謝が速い鳥類では、特に低栄養の海鳥、猛禽、幼鳥、救護された水鳥などでリスクが高く、適切な再栄養計画がないと数時間～24 時間以内に急死することがある。

飢餓状態が続いた鳥類では、エネルギー代謝は当初は肝臓や筋肉の貯蔵グリコゲンを経由して利用するが、これが尽きると、次にエネルギー源として皮下脂肪や大胸筋の筋肉蛋白質を分解してエネルギー源として動員する。この時はインスリン分泌は低下している。鳥では飛行の関係で、体重の軽減を図るために、脂肪の蓄積は少なくすぐに枯渇する。鳥の主な貯蔵エネルギーは飛行に必要な翼を押し下げて大きく空気を後方へと押し出す大胸筋を肥大させて、蓄えている。このことは実に飛行に適した適応である。従って、長く飢餓が続いた鳥ではこの大胸筋が痩せ細り、キールスコア(KS)で表現される大胸筋は KS1～2 で、見かけの体格よりも保定した時に軽く感じる。体温が低下しはじめ、ミトコンドリアでの ATP 産生を抑え、生命維持に必要なエネルギー消費を極限まで切り詰めている状態である。臨床的にはこの代謝が「適応として下がっているのか」「破綻として下がっているのか」を見極めることが重要である。キールスコア(KS)が 2 や 1 を示す症例では長期にわたる餌の摂取不足で、大胸筋の筋肉蛋白を使いきっている状況で、破綻として基礎代謝が低下していると判断する。

この状況で糖質を含む栄養を再投与すると、代謝様態は異化状態から同化状態へと転換する。すなわち、投与された栄養が腸管から吸収されると血糖値が上昇し、それに伴い膵臓からのインスリン分泌が急激に亢進する。その結果、蛋白合成およびグリコーゲン合成が活性化されるだけでなく、電解質の細胞内移行が促進される。

特に重要なのが、リン (P)、カリウム (K)、マグネシウム (Mg) の細胞内移動である。再栄養初期には一時的に血中濃度の平衡が保たれるものの、間もなく体内の電解質貯蔵が枯渇すると、血中リン濃度は急激に低下する。その結果、エネルギー貯蔵に関与する生化学物質である ADP や ATP の合成に必要なリン酸が不足し、ATP 産生障害を来す。これにより、各組織は機能発揮に必要なエネルギーを十分に得ることができなくなり、筋力低下、呼吸筋麻痺、心機能障害等の重篤な臨床症状を引き起こす。鳥類では、高代謝および高体温を維持するという生理学的特性から、リン枯渇の影響が特に顕著に表れやすいと考えられる。これらの代謝異常は、後述する赤血球機能障害や酸素供給不全を介して、臨床的な筋力低下や突然死として顕在化する。



飢餓時と再栄養時の代謝様態の対比図 (異化 vs 同化)

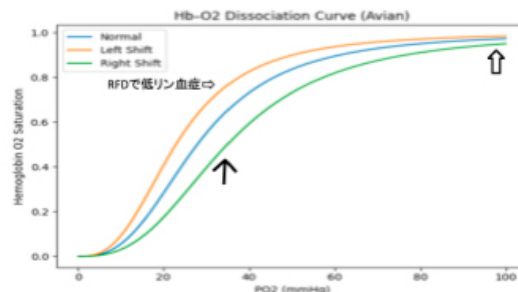
	飢餓 (異化)	再栄養 (同化)
インスリン	低下	急上昇
エネルギー源	脂肪・筋蛋白	糖・蛋白合成
電解質	血中維持	細胞内移行
ATP	低産生	需要急増
臨床	低活動	急変・虚脱

●Refeeding Disorder における低リン血症と赤血球機能障害(病態として RFS、臨床症候群として RFD を用いる : - Na⁺/K⁺-ATPase 破綻と Hb-O₂ 解離障害 -)

(英語読み : Sodium-Potassium ATPase ナトリウム・カリウム・エーティーピーエース)
 =Na⁺/K⁺ポンプ・ナトリウム・カリウムポンプ

リンは ATP の構成要素であり、低リン血症では解糖系が停滞し、ATP 産生が急激に低下する。Na⁺/K⁺-ATPase は ATP 依存性酵素であるため、ATP 枯渇によりその機能は破綻し、赤血球内への Na⁺ 流入と K⁺ 流出が生じる。これにより浸透圧バランスが崩れ、赤血球膜の不安定化や脆弱化が進行し、溶血や微小循環障害が引き起こされる。代謝活性の高い有核赤血球を有する鳥類では、この影響は特に顕著である。

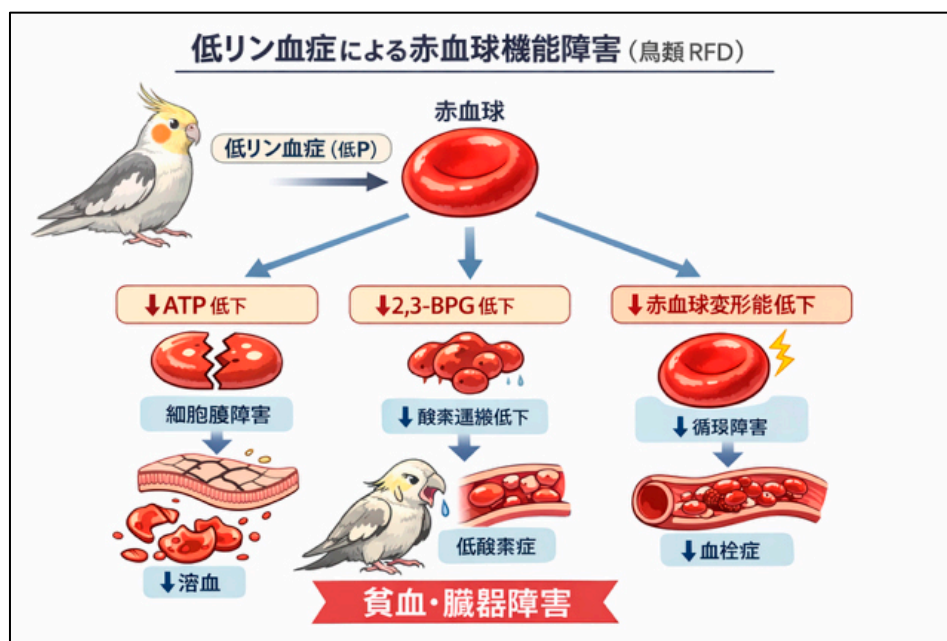
一方、リン欠乏は赤血球内で産生される 2,3-BPG (2,3-ビスホスホグリセリン酸) の合成低下を招く。2,3-BPG はヘモグロビンに結合し、組織への酸素放出を促進する因子であるため、その低下は Hb-O₂ 解離曲線を左方移動させる。結果として、血中ヘモグロビン量や PCV が保たれていても、組織では酸素が放出されにくい「機能的低酸素」が生じる。



左方シフト：酸素親和性↑→組織低酸素リスク
右方シフト：酸素放出↑→動脈血酸素飽和度低下

RFD においては、ATP 枯渇による赤血球膜障害と、2,3-BPG 低下による酸素解離障害が同時に進行する。

このため、明らかな貧血所見がなくても、呼吸促迫、虚脱、神経症状、さらには突然死に至ることがある。RFD の管理においては、低リン血症を「数値の異常」として捉えるのではなく、赤血球機能と全身の酸素供給を破綻させる病態の中核として認識することが重要である。



“Blood cell abnormalities complicating the hypophosphatemia of hyperalimentionation: erythrocyte and platelet ATP deficiency associated with hemolytic anemia and bleeding in hyperalimentioned dog.” Yawata Y, et al. 1974
掲載誌 : Journal of Laboratory and Clinical Medicine. 1974;84:643-658.

臨床症状

鳥類の RFS における臨床症状は非特異的であり、以下のような所見が単独または複合して認められる。

- 全身性筋力低下、起立不能、把握力低下
- 翼の挙上困難

- 飛翔不能
- 呼吸数増加、努力呼吸
- 不整脈、徐脈または頻脈
- 神経症状（振戦、痙攣、意識低下）
- 突然死

●翼の挙上困難の解説：RFD で重要なのは「動作評価」

現場では、次の観察がとても有用です：

- 翼を自発的に体側へ寄せられるか
- 軽い刺激で反射的に翼を広げ・戻せるか
- 数秒保持できるか（すぐ落ちないか）

これらの動作ができない場合、**低リン血症・低K血症・筋ATP枯渇**を背景としたRFDの症状であると認識することが求められる。臨床の現場ではこの翼の症状は肩力(カタジカラ)がないと表現されてきた。

油汚染海鳥や重度消瘦個体では、洗浄後や給餌量増加後 24～72 時間以内にこれらの症状が出現することが多い。

診断の要点

RFS の診断は、臨床経過と血液生化学所見の組み合わせによって行う。

特に以下の項目が重要である。

1. 血中リン濃度の低下（鳥類では 参考値として 2.5 mg/dL 未満は要注意。（種差あり）
2. 低カリウム血症、低マグネシウム血症
3. 重度消瘦（severe emaciation suspected : KS1～2）または長期摂餌不良の病態
4. 再給餌開始後の急激な臨床状態悪化

救護現場では、血液検査が即時に行えない場合も多く、体重、胸筋スコア、行動変化を含めたリスク評価が極めて重要である。

予防と管理

RFS は「治療」よりも「予防」が最も重要な病態である。その具体策がプロトコールである。

1. 低用量からの給餌開始

初期給餌量は維持要求量（RER）の 25～50%程度から開始し、個体の反応を見ながら段階的に増量する。

2. 電解質の事前補正・併用補給

特にリンの補給は重要であり、経口に安全域を考慮しながら投与する。K、Mg も同時に管理する。

3. 体温・水和状態の管理

低体温や脱水は RFS リスクを増大させるため、保温と補液を並行して行う。

4. モニタリング

体重測定、筋力評価、排泄状態、可能であれば血液検査を用いて、再給餌開始後数日間は集中的に観察する。

野生動物救護における意義

RFS は救護開始後、「一見回復しているように見える」時期に発生するため見逃されやすい。しかし、適切な知識とプロトコルを共有することで、多くの救命可能例を失わずに済む病態でもある。共有すべきプロトコルとは

プロトコルとは救護”マニュアル” のことで、Refeeding Syndrome（再栄養症候群）を予防・早期発見・安全に乗り切るための一連の管理項目を、体系化して実施することを指します。

① 対象のスクリーニング（RFS リスク評価）

まず「どの鳥を RFS プロトコルに乗せるか」。その対象は、次の高リスク個体である。

絶食・低栄養が数日以上、著明な消瘦・筋萎縮、油污染鳥、衰弱野鳥、長期保護収容個体、低 P・低 K・低 Mg が疑われる／確認された個体。この時点で「通常給餌は禁止」。

② 給餌開始量の制限（最重要）

RER の 25～50%以下から開始、ただし重症例では 25%程度からとする。給餌内容は急激なインスリン分泌を防ぐ為に、高糖質を避ける。例えば、初日：RER × 0.25。 2-3 日目：0.4-0.5。問題なければ徐々に増量

③ 電解質・ビタミンの予防的補正

給餌より先に、または同時に補正するのが原則：リン（P）：最重要。

カリウム（K）、マグネシウム（Mg）、ビタミン B1（チアミン）は「低値が出てから」では遅く、“RFS を起こさせないための先手補正” がプロトコル管理の要点です。

④ 投与経路の管理

経口／経腸投与が基本で、生体への影響が一番少ない。静注は補正目的のみで慎重に、とくに K イオンは心臓機能に影響が大きいので、静脈内投与は生食水等で十分に希釈して、心電図監視下で、ゆっくりと注入する。「ゆっくり」「分割」「低負荷」が原則。

⑤ モニタリング項目の明確化

必須監視項目は血液：P / K / Mg / 血糖値で。

臨床症状では筋力低下、起立不能翼の挙上困難、不整脈・虚脱の監視と、毎日定時の体重測定・摂餌 a 時間の延長、嚥下困難、嘔吐の観察。☞ チェックリスト化すると事故が激減します。

野生動物救護の現場では、限られた資源と時間の中で判断を迫られることが多い。だからこそ、RFS を常に念頭に置いた慎重な再栄養管理が、鳥類救護の成否を左右すると言える。

おわりに

鳥類における Refeeding syndrome は、野生動物救護医療の質を問う重要なテーマである。本稿が、現場での事故防止と救命率向上の一助となれば幸いである。

中津 賞(なかつ すずむ)

中津動物病院院長 獣医師 獣医学博士

創設 Nakatsu DVM, PhD.

NPO 法人 野鳥の病院 代表理事

野生動物救護獣医師協会 WRV 理事・大阪支部長

大阪府獣医師会動物救護委員会委員

〒590-0012 大阪府堺市堺区浅香山町1丁3番25号

090-7499-2122 e-mail: nakatsu@nakatsuvet.com

沖縄こどもの国

公益財団沖縄こどもの国 動物園創造局 吉見 裕子

【施設紹介】

沖縄こどもの国は、沖縄市にある動物園とチルドレンズミュージアムを併せ持つ、子どもたちの学びと体験の場です。その歩みは、沖縄の復帰前、子どもたちが健やかに育つための施設を求める声を背景に始まりました。1960年代後半に構想が進み、1970年5月5日、旧沖縄県総合運動場跡地に「沖縄こどもの国」として開園。動物園、遊園地、水族館、プールなどを備え、親子で楽しめる総合的な児童福祉・教育施設として親しまれてきました。復帰後は財団法人による運営を経て、展示や施設の整備を重ね、郷土館など地域を学ぶ場も加わりました。さらに2000年代には「沖縄こどもの国 Okinawa Zoo & Museum」として再出発し、現在は「人をつくり 環境をつくり 沖縄の未来をつくる」を理念に、琉球弧の自然や生きもの、地域の文化にふれながら、子どもたちの好奇心や探究心を育む場所となっています。

当園では、琉球弧の自然や文化、生き物の多様性を伝える展示にも力を入れています。琉球弧とは、九州の南端から台湾に至るまで、約1200kmに連なる100以上の島々のことです。亜熱帯海洋性気候に属し、一年を通して温暖で湿潤な環境にあります。また、古い時代に形成されたトカラ海峡やケラマ海裂を境に生物相が大きく異なり、北琉球・中琉球・南琉球のそれぞれで独自の生態系が育まれてきました。

琉球弧エリアの「アークおきまる」では、県内で傷病鳥獣として救護され、野生復帰が難しく終生飼育となった動物や、園内で繁殖した個体を展示しています。大展示室では、オリオオコウモリやカラスバトなどを混合展示しており、オオコウモリが飛翔する姿や採餌の様子を間近で観察できます。そのほか、カンムリワシ、クロツラヘラサギ、ダイトウオオコウモリ、オキナワイボイモリなどの希少種や、ダイサギ等の鳥類の混合展示を行っています。特にダイトウオオコウモリは国内で唯一、生体を常設展示しており、2024年5月には飼育下での初繁殖に成功し、2026年1月に日本動物園水族館協会の初繁殖認定賞を受賞しました。



オリオオコウモリ（育仔中）



カンムリワシ（展示個体）



ダイトウオオコウモリ
(2024年繁殖個体)

アークおきまるの近くにはクイナ舎があり、環境省のヤンバルクイナ保護増殖事業の一環として、感染症などによる絶滅リスクを分散するためのヤンバルクイナの飼育に取り組んでいます。通常は非公開ですが、ガイドやクイズラリーなどでヤンバルクイナについて学んだ後、限定的に見学できる普及啓発イベントも実施しています。また、隣接するヤクシマザル舎では、屋久島に分布するニホンザルの亜種で、ニホンザルとして最南端に生息するヤクシマザルを展示しています。サル山全体がケージで囲まれているため、群れの行動や社会性を、さまざまな角度から観察することができます。

在来家畜の展示では、琉球弧の島々で、古くから人々の暮らしのそばにいた動物たちを紹介しています。ヨナグニウマは展示の他、乗馬体験も行っています。また、琉球王国時代に行われていた馬の歩様や、人馬の装飾の美しさを競う競馬「ンマハラシー」は戦争により途絶えていましたが、

地域団体との協力により2013年に復活させ、現在も毎年イベントを開催し、離島を含む県内各地から人と馬が集まる行事となっています。在来鶏のウタイチェーンにおいては、特徴的な三音節の鳴き声を楽しむ鶏鳴文化を、在来豚や在来山羊では、沖縄の食文化とのつながりを伝えています。

爬虫類エリア「ハンターの潜む秘境」では、ハブやアカマタなどのヘビ類、リュウキュウヤマガメ、セマルハコガメ、キシノウエトカゲなど、琉球弧に生息する多様な両生類・爬虫類を展示しています。また、シラユキヤマタカマイマイをはじめ、生息地が極めて限定的で絶滅が危惧される琉球弧のマイマイ類についても、飼育・繁殖に取り組んでいます。

【傷病鳥獣保護の取り組み】

当園は、1970年の開園以来、当時、県内唯一の動物園として県民から持ち込まれる傷病野生動物を受け入れてきました。1985年には沖縄県から傷病鳥獣救護事業を受託し、救護施設として一次救護を担うことになりました。そして2007年以降は、沖縄県傷病野生鳥獣救護実施要領に基づき、野生動物救護ドクターによる一次救護後のリハビリや終生飼育など、二次収容を中心とした役割を担っています。記録に残る1985年から2024年3月までの傷病鳥獣保護受入件数は4,557件で、そのうち1,050件が野生復帰しています。

現在も二次収容施設としての役割を継続しており、2025年度はアオバズクなど13件の二次受け入れを行いました。二次受け入れ後、リハビリにより回復し、野生復帰が可能となった個体は自然へ戻すことを目指し、障害や後遺症などにより野生復帰が難しい個体については終生飼育を行い、ペア形成が可能な場合には繁殖にも取り組んでいます。野生由来の動物は人に慣れていないため、傷病保護施設は通常非公開ですが、愛鳥週間や動物愛護週間などに合わせて普及啓発イベントを開催し、希望者を対象に限定的な見学ツアーも行っています。

救護や終生飼育は、単に命をつなぐだけでなく、保全や研究にもつながっています。これまでに、カンムリワシ、カラスバト、クロツラヘラサギなどの鳥類、リュウキュウヤマガメなど爬虫類、哺乳類ではオリオオコウモリ、ダイトウオオコウモリなど、琉球弧の希少な野生生物の救護や保全に関わってきました。野生復帰が難しい個体については、飼育下での行動研究や繁殖技術の確立、感染症モニタリング、死因検索、大学や研究機関との共同研究などにも活用し、保全に必要な知見の蓄積に努めています。

また、普及啓発も重要な活動と位置づけ、愛鳥週間、動物愛護週間、クイナの日、カンムリワシ週間などに合わせた飼育員による動物ガイドや各種イベントを行い、子どもから大人まで幅広い世代に、傷病鳥獣や希少種、身近な自然との関わりを伝えています。特に愛鳥週間の取り組みは、1972年の財団設立当初から続く長い歴史を持っています。

こうした長年にわたる野生動物救護と保全、普及啓発の取り組みが評価され、令和7年度野生生物保護功労者表彰において、長年当園で傷病野生動物救護に携わった金城輝雄獣医師が「公益財団法人 日本鳥類保護連盟会長賞」を、沖縄こどもの国が「環境省自然環境局長賞」をそれぞれ受賞しました。これらの受賞は、沖縄こどもの国が地域の動物園として野生動物の命を救い、それを種の保全へつなげ、その大切さを社会に伝え続けてきた歩みを評価していただいたものとして、大変喜ばしいことでした。

【最後に】

沖縄こどもの国で傷病鳥獣に関わりながら、一県民として、琉球弧の自然の豊かさ、希少種の多さに驚かされるとともに、野生動物をとりまく環境の課題など、まだまだ知るべきことがたくさんあると感じています。

動物園には、動物との出会いを通して「知る」「学ぶ」「楽しい」を届ける力があります。

その体験は、子ども達の好奇心を育むだけでなく、希少種の保全や自然環境の変化といった課題を自分たちに関わる身近なものとして考えるきっかけになります。沖縄こどもの国では、動物園がもつこの役割を活かし、琉球弧の生き物や自然、そして人とのつながりを伝えていきたいと考えています。



保護飼育中のアオバズクたち

寄稿写真のご紹介

前号に引き続き、WRV 会員である長島順子様よりお送りいただいた、野生動物の
写真をご紹介します。（撮影地：長野県上田市内）



アナグマ



ツキノワグマの幼獣



ホンシュウジカの幼獣



ホンドギツネ



アオサギ



アオサギ

※WRV ホームページ上のカラー版も是非ご覧ください。
(WRV ホームページアドレス：<http://www.wrvj.org/>)

韓国のツキノワグマ

国内においては、今年も東北地方を中心に人の生活圏におけるツキノワグマの出没が相次いでおり、大きな社会問題となっておりますが、隣国である韓国においてはどのような状況なのでしょうか。



実は韓国においては、かつては相当数生息していたものの、日本による植民地時代における大量駆除や、1950年代の朝鮮戦争による国土の荒廃、そして1970年代まで行われていたという密猟などの影響により、2000年頃には、20～30頭程度にまで激減してしまったということでした。

そこで韓国政府は、1982年にツキノワグマを国の天然記念物に指定し、その後の保護活動に取り組むようになりました。特に、2001年から始まった韓国南部にある智異山国立公園を中心とする復元プロジェクトは有名で、国立公園局・絶滅危惧種回復センターにおいては、ロシアや北朝鮮からの移入、人工繁殖や子グマの放獣等も順次行われ、現在では周辺地域だけで、約100頭の野生状態の個体が確認できるようです。

一方で、1980年代以降、韓国では高価な漢方薬として有名な「熊胆(ウンダム)」を採取するため、全国規模で海外から輸入されたツキノワグマの飼育が行われ、2015年頃にはその数が1000頭に及びました。しかし、その飼育状態が極めて劣悪であったため、それらの買い取りや保護により、政府の専用施設や保護団体のシェルターに移されたりして、現在は約200頭に減少したようです。しかしこの度、韓国内ではクマの飼育が法律で禁止されるようなので、残った個体や業者等に引き取られた個体の行方が心配されているということです。なお、長い間劣悪な環境下で飼育状態にあった個体については、残念ながら、その大半が野生復帰には向いていないようです。

ツキノワグマと人との関係については、日本も韓国もそれぞれ大きな課題を抱えている状況ですが、やはりあるべき共存の姿を追い求めつつ、今後に向け、有効と思われる手段を一つ一つ尽くしていくしかないように思われます。

(WRV 事務局長 箕輪 多津男)

【 事務局より寄付のお礼 】

寄付ご協力者 (敬称略) (令和6年3月1日から令和6年5月31日)

○神奈川支部寄付金 2026.4.19 夢見ヶ崎動物公園・飼育の日イベント (募金箱) 335 円
2026.5.9 田中秀行 10,000 円

事務局日誌 2026.3.14～2026.6.14

=== 3月 ===

14～15: 野毛山動物園・動物たちの SOS 展 [神奈川支部]	対応: 皆川
17～5/31: 「もっと知ってアライグマのこと」パネル展示 (野毛山動物園) [神奈川支部]	対応: 皆川
15: 第 67 回日本獣疫病学会学術集会 (日本獣医生命科学大学: Web 併用)	対応: 加藤
18: 神奈川県傷病鳥獣保護連絡協議会 (オンライン) [神奈川支部]	対応: 皆川
21: 日本法獣医学会・第 5 回学術集会 (日本獣医生命科学大学: Web 併用)	対応: 小山
25: WRV ニュースレター No.136 発行	対応: 小松、箕輪、二階堂
26: 東京都獣医師会ミーティング (ビジョンセンター)	対応: 中川、高橋、小松、新妻

26,29: 犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動 [神奈川支部] 対応: 皆川
 28: 第91回日本野生動物医学会理事会 (Web 開催) 対応: 加藤
 31: 令和7年度「水鳥救護研修・情報整備業務」報告書 提出 (環境省) 対応: 二階堂

=== 4月 ===

01: 令和8年度「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」スタート 対応: 箕輪
 11,23,29: 犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動 [神奈川支部] 対応: 皆川
 12: ヒメアマツバメ・ヒナ救護に関する勉強会 (厚木市文化会館) [神奈川支部] 対応: 皆川
 12: 令和8年度WRV総会 (立川事務所) 対応: 小松、小山、高橋、小森、箕輪、二階堂
 12: 令和8年度WRV東京都支部総会 (立川事務所) 対応: 小松、高橋、小森、箕輪、二階堂
 18: (NPO)丹沢自然保護協会 植樹 [神奈川支部] 対応: 皆川
 18: 令和8年度わいわいサロン (オンライン) [神奈川支部] 対応: 皆川
 19: 夢見ヶ崎動物公園・飼育の日イベント [神奈川支部] 対応: 皆川
 21~24: 第41回世界獣医師大会 (東京国際フォーラム) 対応: 小松、中川、高橋、新妻、小山、植松
 28: (公社)東京都獣医師会監査会 (東京都獣医師会会議室) 対応: 小松、中川、高橋
 29: 東京環境工科専門学校生・インターンシップ (犬猫・野生動物救護センター) [神奈川支部] 対応: 皆川

=== 5月 ===

01,03: 東京環境工科専門学校生・インターンシップ (犬猫・野生動物救護センター) [神奈川支部] 対応: 皆川
 07,17: 犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動 [神奈川支部] 対応: 皆川
 08: (公社)東京都獣医師会理事会 (東京都獣医師会会議室) 対応: 中川、高橋、小松
 12: 傷病野生鳥獣保護治療状況確認 ((公社) 東京都獣医師会・書面) 対応: 箕輪
 12: 令和7年度WRV事業報告書等提出 (東京都庁・郵送) 対応: 箕輪
 22: 帝京科学大学アニマルサイエンス学科1年アニマルサイエンストピックス講義 (千住キャンパス) 講師: 皆川
 22: 令和8年度日本コウノトリの会・理事会 (Web 開催) 対応: 箕輪
 23: バードウォッチングイベント (横浜市立野毛山動物園) [神奈川支部] 対応: 皆川
 27: 厚木市立玉川小学校4年生の学習指導 [神奈川支部] 対応: 皆川

=== 6月 ===

06,10,12: 犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動 [神奈川支部] 対応: 皆川
 10~12: ヤマザキ動物看護大学実習用ハト貸出 [神奈川支部] 対応: 皆川
 12: 令和8年度環境省水鳥救護研修センター・運営協議会 出席: 小松、箕輪、二階堂
 12: 令和8年度東京都外来鳥獣(アライグマ・ハクビシン)防除対策検討委員会・第1回作業部会 (東京都庁) 対応: 加藤
 14: (公社)東京都獣医師会総会 (都市センターホテル) 対応: 中川、高橋、小松
 14: 和秀雄先生、羽山伸一先生を偲ぶ会 (日本獣医生命科学大学) 対応: 加藤、大窪、安田、皆川、箕輪

野生動物救護獣医師協会 (ホームページ) <http://www.wrvj.org/> (E-mail) kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No. 137 2026.6.25 発行

発行: 特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局: 〒190-0013 東京都立川市富士見町1-23-16 富士パークビル302

TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人: 小松 泰史 編集文責: 小松 泰史 編集担当: 箕輪 多津男